

# 日本地衣学会

# No.53

# ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信.....	185
	机上地衣類観察会報告—「自然をめぐる千年の旅」で出会える地衣類／ 安斉唯夫.....	185
	台湾地衣類調査行2005（その1）／原田浩.....	187

## 会員通信 From Members

### 机上地衣類観察会報告—「自然をめぐる千年の旅」で出会える地衣類

愛知万博記念特別展「自然をめぐる千年の旅」は、愛知県美術館において3月11日から5月8日まで開催されています。私はこの特別展を新聞の紹介記事で知りましたが、場所が名古屋市と遠いうえに開催期間も短く、会場を訪れることが難しそうでした。そこで、図録を取り寄せたところ、地衣類の描かれた作品を数多く発見することが出来ました。気の付いた限りでは14作品で地衣類を観察することができますが、その一端を机上観察会報告としてお届けいたします。

#### ◇図版3：如意輪観音像〈鎌倉時代十四世紀〉

蓮台に座した観音様の下には滝の流れ落ちる断崖がそびえ、松や梅（桜？）の古木が描かれています。古木の幹かあるいは断崖の壁面か定かではありませんが白く縁取られた類円形の模様が並んで描かれ、葉状地衣類のようです。白く縁取られた類円形の模様は他の作品にもよく見られ、地衣類を描くときの共通した図案のように思われます。人家のある山中に生育し、樹上でほぼ円形に広がり、縁には粉芽塊のような白点が連なる、というのはマツゲゴケを模しているのではないかと腕組みしながら想像してしまいます。

#### ◇図版54：日月四季花鳥図屏風（室町時代十五世紀）

満開の八重桜を描いた春の屏風と紅葉を配した秋の屏風が一双をなしています。桜の幹は苔を思わせる濃い緑で被われ、相当湿度の高い環境かと思われます。その中に白く縁取られた類縁形の葉状地衣が数え切れないほど描かれています。中央部が黒みを帯びているのは裂芽が密集しているのでしょうか。また、裂片の形が見えないということは、トゲウメノキゴケかもしれません。秋の屏風には左から右に川が流れています。手前側には平坦な河原が広がり、水流のぶつかる対岸は露岩が連なっています。その露岩には、上にと広がるように成長する白く丸い模様がいくつも描かれ、まるでヘリトリゴケのようです。

#### ◇図版55：四季花木図屏風（室町時代十五～十六世紀）

白砂を敷き詰めた庭園風の景色には岩と平地が広がり、平地には松が、石組みには梅が枝振りを競っています。松の根元はふかふかの苔のようですが、その幹には明らかに2種類の地衣類がみとれます。地衣体の縁を白くくっきりと描いた地衣類と、縁がやや薄い緑でほ

んやりとしていて、中央部が濃い緑色をした地衣類の2種類です。梅の木にも同様の地衣類が沢山着いていますが、ウメノキゴケが生育するにはやや湿り気が高すぎるようです。

#### ◇図版57： 四季花鳥図屏風（狩野宗秀，桃山時代十六世紀）

ごつごつした岩の間には沼でしょうか、深い緑の水面もみられ、ひと抱えもありそうな大木が天を突いています。大木の幹には良くみられる白く縁取られた葉状地衣類（何度もでてくるので仮に“シロブチゴケ”と呼ぶことにします）が着いていますが、興味深いのは岩上にもこの“シロブチゴケ”が多数見られ、そのほとんどが岩の稜に着いていることです。これは落ち葉に被われない場所を選んで生育しているのでしょうか。ただ、全ての地衣類が正面から見たように描かれているのは、作者の手抜きというよりはこの時代の描き方だったのでしょうか。

#### ◇図版60： 高雄観楓図屏風（狩野秀頼，室町～桃山時代十六世紀）

地衣類ファン必見の作品です。折り込んだ3頁分に印刷された大きな屏風には、紅葉の楓や松、桂川の河岸の岩肌、遠く雪をかぶった杉に至るまでびっしりと地衣が着生しています。その数、千を超えます。その全てが典型的な“シロブチゴケ”1種類なのは残念ですが、この個体数はひょっとすると日本最多かもしれません。私には、絵の全貌が完成した後でここにも、あそこにもと次々に地衣を書き足していった、そんな寂しさも感じられる大作でした。

#### ◇図版71： 木の中の秋（下村観山，明治40年）

鮮やかな褐色の幹肌をみせる1本の檜には、丸みを帯びた大きな裂片と中心は裂芽が密生しているためか黒みを帯びた、これはもうウメノキゴケとしか考えられない地衣類が多数着生しています。しかも、幹肌の片側だけに着生している様子からは、陽の光が作者の左肩後方から差し込んでいることが判ります。なめらかな広葉樹の幹肌にはモシゴケともみえる痂状地衣も描かれ、私は下村観山が大好きになりました。林の奥を見通せば、地衣の木がどこまでも続いています。強いて疑問を投げ

かければ、1本の樹木には1種の地衣しか描かれていないことですが、絵の中に入り込んで確かめてみたい、そんな気持ちがわいてくるほど心地よい林です。

下山観山が気になった私は神田の古本屋街を歩いて、「天心の時代と大観・観山・春草展」の図録をみつけました。これは平成四年に松山三越で催された岡倉天心生誕百三十年記念の展覧会図録ですが、収録されている「鶴嶋図（明治34年）」を見て仰天しました。千葉県銚子の観察会で見た海岸の岩壁に着生する痂状地衣そのものではないだろうか。激しく波の打ちよせる岩礁の壁面に斑状の模様がひしめき合うように描かれています。描かれた場所は不明ですが、一派の活動拠点だった日本美術院が茨城県五浦にあり横山大観らとともに暮らした時期があったことから、私は五浦の海岸の光景かもしれない、と想像しました。いづれ、青空地衣教室を開いて確認しなければなりません。

#### ◇図版76： 行く春（川合玉堂，大正5年）

解説には「寄居から長瀨にかけての多摩川」とされていますが、これは荒川の間違いでしょう。長瀨に多い緑色変岩の色彩でしょうか、淡い緑色の岩量の上に、舞い降りる桜の花びらとは明らかに異なる岩上生地衣類が多数みられます。類円形で縁が白いところは“シロブチゴケ”に似ていますが、白い部分が幅広く、なんとなくヒペルフィスキア・クロカータに似ているのです。

#### ◇図版101： 虫魚画卷（小茂田青樹，昭和6年）

6枚の絵に小動物や草木が生き生きと描かれています。どうした訳か音の気配を感じさせません。そんな絵の1枚には、朝露がおりたのでしょうか、水滴できらめく蜘蛛の巣が2つ大きく描かれています。絵の端には一本の木が描かれ、細かな裂片が幹肌に密着したような葉状地衣がみられます。地衣体の中心には黒い点がうたれ、その部分が剥落しているようです。この様子はコフキチリナリアに似ているのですが、所詮は印刷、持ち出したルーペで覗いても円形の粉芽塊は確認できませんでした。

### ◇図版110：八橋蒔絵硯箱（桃山時代十六～十七世紀）

どこかの庭園のようです。八橋のかけられた池中には岩がつきだし、その岩上には地衣類がくっきりと描かれています。絵画ばかりでなく色彩に制約のあるこうした蒔絵にも地衣類が描かれていることに、嬉しさを覚えます。

この他にも、九品来迎図（鎌倉時代十三世紀）、浜松図屏風（伝土佐光茂、室町時代十五～十六世紀）、雀の小藤太絵巻（室町時代十六世紀）、伊勢物語図屏風（江

戸時代十七～十八世紀）、落葉（菱田春草、明治42年）の各作品に地衣類とおもわれる模様が描かれています。

間もなくこの展覧会も終了してしまいますが、皆様も机上観察会はいかがでしょう。図録は厚さ2.5cm、カラー頁も200頁以上ありながら定価2500円（送料別）でお薦めです。図録の入手方法は愛知県美術館ホームページをご覧ください。

次回は、日光東照宮にご案内いたします。陽明門、三猿の彫り物で観察できる「シロブチゴケ」をカラー図版入りでご紹介しましょう。

（安斉唯夫：ゼルグプランニング）

## 台湾地衣類調査行2005（その1）

1月の雲南の調査の記憶もまだ新しい4月、台湾へと旅立った。今回の目的も雲南同様、淡水生アナイボゴケ科地衣類の調査である。中でも、台湾北部の基隆Keelung郊外の暖暖Nuan-nuanという場所でFaurieによって採集された標本を基に、Bouly de Lesdainによって新種記載されたミドリサネゴケ属の*Staurothele fauriei* de Lesd. の再発見が最重要課題だった。本種のタイプ標本はフランス北部のDunquerqueにあったが、第2次世界大戦中に焼失し

てしまったと考えられる。またBouly de Lesdainの原記載はごく単純なもので、図が無いことはもちろん、記載から実像を描くことはとても困難であった。そこで、基準産地周辺での調査、というわけだ。

### 玉山国家公園、巨木の森へ

4月13日夕刻に台湾の中正国際機場に着き、台中へは高速バスで移動（このときは頼さんの奥さんに同行していただいた）、東海大学（日本のとうかい大学とは違

う）のHostelで一泊した後、頼さんと、部下のHsueh I-chenさんが交代で運転するトヨタの四駆車で高速道路を南下、東に折れ南部横貫公路に入り、山岳地帯へと向かっていった。「マンゴーの有名な産地」を経由し、「サトイモの有名な産地」では里芋アイスを食べ（とても寒かった）、「布農（ブヌン）族」の村では村祭り（？）の山車の間をすり抜け、目的地近くの山の麓の小さな



図1. 紅檜の巨木が常緑広葉樹と混じる。標高約2500m.



図 1. 台湾鉄杉の巨木の森。標高約 2800m。

町で昼食を取り、またそこでは夕食用に「弁当」を調達した。斜面に沿って曲がりくねった狭い道を登って行く。幸いなことに、舗装されている。梅山(Meishan)にある玉山(Yushan) 国家公園のビジターセンターで日本語と英語のパンフレットを調達(案外これが役に立った)、隣接する小さな民俗博物館で布農族のかつての暮らしを垣間見た。

標高 2000m 程になると急に霧が深くなり幻想的な光景に変わっていった。道路脇には徐々に大きな樹が現れ始める。さっそく停車し、地衣類の調査となった。カブトゴケ属 *Lobaria*(中でもエヒラゴケ類)、トゲウメノキゴケ *Parmelinopsis minarum*?, チャシブゴケ属 *Lecanora*, ザクロゴケ属 *Haematomma* それから

*Cetrellopsis*, …更に進んで峠(標高 2722m) から 8km 手前の橋の袂に停車し、登山道沿いに少々調査とあいなった。登山道はよく整備されていた。やがて巨大な針葉樹が現れた。ヒノキの仲間の紅檜 *Chamaecyparis formosensis*らしい。大きいものでは根元で直径が優に 2m を超えそうであった(図 1)。

本番は翌 15 日、再び昨日と同じ登山道を登る。登り口は標高 2400m 程度。頼さんは 3100m の頂上まで行きたいと言っている。

昨日の紅檜の巨木(図 1)の脇を通り抜け、紅檜とカシ類など常緑広葉樹の混交する森林を登っていく。トウヒ属の台湾雲杉 *Picea morrisonicola* も混じる。徐々にツガ属の台湾鉄杉 *Tsuga chinensis* var. *formosana*が増えていき、やがて純林になり、直径 2m 前後の巨木が林立する森となっていた(図 2)。幹には所によっては *Cetrellopsis*, アンチゴケ属 *Anzia*, カブトゴケ属 *Lobaria*, ヨロイゴケ属 *Sticta* などの大型地衣も多い。尾根道ばかりの本日のルートでは、淡水生アナイボゴケ科は期待できない反面、樹幹に着生するこれらの大型地衣が十二分に私の目を楽しませてくれる。

(続く)

(原田浩：千葉県立中央博物館)

### ●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌42号148ページに。

### ●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 42, p. 148 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 53号

発行日：2005年 5月 23日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄  
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内